



Title	The Woodlanders について
Author(s)	宮本, 義久
Citation	長崎大学教養部紀要. 人文科学. 1979, 19, p.129-139
Issue Date	1979-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10069/9695
Right	

This document is downloaded at: 2019-04-26T00:08:36Z

The Woodlanders について

宮 本 義 久

On *The Woodlanders*

YOSHIHISA MIYAMOTO

I

「長年ぶりに *The Woodlanders* を取りあげて読んでみると、私はこの作が、‘ストーリーとしては’一番好きです。多分、物語の場所と風景のためでしょう。私が大好きな地域なのです。*The Return* 以上に風変りな面白味があり、新鮮なストーリーに思えますし、人物は非常に明確に描かれています。」^① ハーディが1912年、全集の新版「ウェセックス版」の校正中に、ある友に書き送った言葉である。ハーディの代表的傑作といえは通例、*The Return of the Native*, *The Mayor of Casterbridge*, *Tess of the d'Urbervilles*, *Jude the Obscure* が挙げられ、*The Woodlanders* (1887) はあまり評価が高くはないようである。この好意的でない評の代表は、J. W. ビーチによるものであろう。この作中の一節に、‘...dramas of a grandeur and unity truly Sophoclean are enacted in the real, by virtue of the concentrated passions and closely-knit interdependence of the lives therein.’ (pp. 4-5) とある。ビーチはこの一節から、この作品は、作者の狙ったドラマとしては失敗作であるとする。ドラマの要件は、情熱の集中と継続にあるのに、この作品では他に抜きん出る中心人物は存在せず、作中人物はすべてその情熱を欠き、興味の中心は始終分散、移動する。軽重の選択もなく、出来事が次々と関連もなく述べられ、年代記の観を呈している、というのである。^② I.ハウは、この作品の狙いはドラマではなく、悠長なポートレート集であるとする。この作の最大の弱点は、プロットとポートレートの描写との有機的関係の欠如である。プロットの方は、この作品の主要眼目ではないと述べるのである。^③ 両者に共通するところは、このドラマ性の否定と、プロットへの相対的に低い評価である。又、両者共にこの作品に認めるのは、その詩的特質である。即ち、作者が愛情を込めて描く、リトル・ヒントックの森林地と、そこに住む人々の生活一季節毎の光景、音、臭い、生活習慣一から喚起される詩情であり、又、この狂乱の群を離れているかのように、‘outside the gates of the world’ (p. 4) に、厳しい労働の中にもひっそりと暮しを立てている、素朴で善良な一人の貧しい娘マーティ・サウスが、避け難い運命の苛酷

な風に揉まれながらも、痛ましくも耐え、振り返ってくれることのなかった男の墓前に、哀切な嘆きと、将来への決意を吐露する独白から溢れる、忘れがたい詩情であるということである。

The Woodlanders で最も感銘を与えるのは、この特質であるのは確かである。これが作者のプロットの発想と展開の根底にあったと思われ、その点で、ビーチやハウの指摘は確かに、この作の特色を浮き彫りにしていると言えよう。H. C. ダフィン⁴は、マーティに充てられる紙面の少なさを不満とすると共に、この作品は、ウェセックス小説中最も美しいものであるが、冒頭に引用したこの作を最も好むという、作者自身の言にも拘らず、最大傑作に加えるのは、少々無理である、としている。⁴ 又、M. ウィリアムズは、この作品を、ハーディの田園生活を描写した作品中で、最も田園詩的作品の一つとしているが、この辺りが、この作の妥当な評価であろう。その意味で、作者ハーディの偽らざる素直な好み、本領が発揮されていると見ることが出来るのである。そして、それはハーディにとっては、抒情詩の領域に属するものであったと言い得よう。

II

The Woodlanders は、ビーチの述べる如く、「真にソフォクレス的の壮嚴さと、統一のあるドラマ」とは言い難いであろうが、「そこに生きるもの達の情熱や緊密に結ばれた相互依存」という点では、首肯せざるを得ないであろう。それが取りも直さず、この作品のプロットをなすものであるが、その方面から検討を始めてみよう。

先ず、物語の主舞台たる、この森林地リトル・ヒントックの村にも、生れ、教育、富、階級に依る、社会的地位のヒエラルキーが存在する。最上位に位置しているのは、大地主のチャーモンド夫人である。彼女は種々の‘man-traps’ (p. 67) を飾った荘園館に住む若き未亡人で、村人にとっては、その命運も彼女の気紛れ次第という‘Olympian creature’ (p. 44) である。次の地位に存在するのは、貧乏開業医のフィッツピアズである。彼は没落した貴族の末裔のインテリ青年である。土地の金持ちの材木商メルベリが次の地位、全体の階層での丁度中間を占める。そしてその娘グレースが、このプロットを中心人物である。ジャイルズ・ウィンターボーンは、秋になるとリンゴやリンゴ酒を商い、他の季節には森林の仕事でメルベリの手助けをし、メルベリよりも下の階級に属する。最も下の階級に位置するのは、メルベリの下で、森の仕事の下働きをする娘、マーティ・サウスである。

このヒエラルキーの中にあって、異性間に於いては、各自その一つ上の階層との結合へ向う傾向が見られる。恋愛遁走曲とも言うべきであろうか。それに絡んで今一つのヒエラルキーが存在する。それは、登場人物の森林世界への密着度である。地主のチャーモンドと医師のフィッツピアズは、元来都会人であり、この世界には異邦人である。彼等にとってヒントックの生活は孤独そのものであり、毎日が倦怠の欠伸の連続である。両者共森と住民に馴染まず、自

分だけの世界に引き籠り、身の不遇を託つ。二人にとってこの世界は、自己の目的のために存在するものであり、この小共同体に対して彼等が演ずる役割りは、利己の利用、略奪、攪乱のそれであると言ひ得る。チャーモンドは 'cross-loves and crooked passions' (p. 274) をお手のものとする女優出身で、コケティッシュで移り気な享楽主義者である。男を引き付ける道具としてかつらを作る為に、マーティの美しい髪を強引に買い上げ、彼女の「女」を奪い、ジャイルズの生活の基盤を奪い、(間接的にジャイルズはグレースを失う。) グレースから夫フィッツピアズを奪うのである。フィッツピアズは、錬金術や詩や占星術、天文学、ドイツの思弁哲学、好色文学の愛好と、巾広い趣味を持つが、元来、空想的観念論者である。そして又、昔の貴族の家柄を意識して、村人を軽蔑するスノップでもある。彼はグレースと結婚するが、義父をその社会的地位故に軽蔑し、彼の世間的体面を低下させるものと恥じながら、経済的にはメルベリを利用することを恥じないのである。

彼はメルベリの金を利用して、嫌悪する森林地の生活形態から逃れ、都会で開業しようと計る。しかし、その宿願が達成されようとする寸前に、チャーモンドと近付きになるや否や、今度は彼女に逆せ上って、計画を放棄してしまう。彼にとって、その哲学も知識も、何の役にも立たぬ虚飾に過ぎない事が立証される。彼の多才は多情に通じている。節操のない軽薄才子の見本みたいな男である。チャーモンドとフィッツピアズは、正しく似合いの男女であり、作者は諷刺的意図をもって、二人を戯画的なタッチで描いているのである。

この上流階級の都会的グループに対応しているのが、下層階級の田園人、ジャイルズとマーティの男女一対である。この二人は、常に森の生活に溶け込んで、黙々と熟練した技術を以て、労働に従事する姿が描かれる。彼等は、大自然の神秘を理解し、それとの靈的交わりに生きている。

Marty South alone, of all the women in Hintock and the world, had approximated to Winterborne's level of intelligent intercourse with Nature. In that respect she had formed his true complement in the other sex, had lived as his counterpart, had subjoined her thoughts to his as a corollary.... They had planted together, and together they had felled; together they had, with the run of the years, mentally collected those remoter signs and symbols which seen in few were of runic obscurity, but all together made an alphabet. (p. 399)

ジャイルズが果実の神、森の神とすれば、マーティは森の精とでも言うべきであろう。そして二人は、森と慎ましい生活との詩を奏するのである。この二人には、作者の理想化が微妙に施されている。

社会的地位の低さから、又、その劣等意識から、ジャイルズとマーティは、自己主張はおろ

か、自己を否定し、犠牲にし、抹消して、常に受動的立場を守り、黙々と運命に対するストイックな忍従に生きる。この二人こそ、シュライエルマッハーの奉じる基本的美徳として、フィッツピアズが挙げる、‘Self-control, Perseverance, Wisdom, and Love’ (p. 167) に適合する人物である。大自然と密着した堅実な労働生活の所産である。

森の世界への密着度が示すヒエラルキーの中で、この二組の男女の中間的存在が、メルベリ父娘である。この父娘が、都会人側と田園人側、上流階級側と下層階級側、人工と自然との間を揺れ動くことで、プロットは進められてゆくのである。メルベリ自身は、森林生活に特に不満を抱いている訳ではない。しかし、彼は自分の全存在を掛けて溺愛する一人娘グレースの幸を願うが故に、森の世界へ背を向ける態度を取る。若い時から森林での重労働で叩き上げた身の彼には、知識面と階級面で、苦い恥辱を味った経験がある。この劣等意識の故に、彼は大金を投じて、身分不相応にも、上流階級の子女の集まる都会の学校に娘を入れるのである。メルベリには又、過去に遡る罪悪意識があった。親友だったジャイルズの父の許婚をトリックを弄して奪い、妻としたのである。それが、今は亡きグレースの母である。彼は娘に高等教育を授けて、幼馴染みのジャイルズと結婚させ、昔の償いをしようと思っているのである。しかし娘の教育は、彼を予期せぬディレンマに追い込んだのである。娘の幸の為の「良い」結婚とは、即ち上流階級との結婚であり、ジャイルズと結婚させることは、自分の犯した罪の為に娘を犠牲にすることであると、メルベリは考える。ジャイルズが土地家屋保有権を取り上げられ、無一文になった事は、願ってもない出来事であった。やがて、フィッツピアズが、グレースに求婚する。貴族の家柄には盲目的崇拜を抱く、古風なメルベリは、娘を説得して結婚させる。彼自身の為ではなく、娘の幸福の為としながらも、実は、彼の知的、社会的地位の劣等感の裏返しに価値観、社会的野望が、為せる行為であると考えて良いであろう。教育投資は無駄にはならず、収益を上げたかに思われるのであった。しかし、やがてフィッツピアズとチャーモンドの「頹廢的でセンチメンタルな恋愛事件」^⑥ が起るに及んで、彼は娘の不幸な姿に自分の判断の誤りを悟る。初めの心積り通りに、貧しくとも実のあるジャイルズと結婚させておけばよかったと、後悔に苛まれるのである。女地主と医師が、大陸へ駆落ちした後は、メルベリは新施行の離婚法の話聞いて、娘の離婚を成立させようと奔走する。傍、娘に勧めてジャイルズとの接近を計らせるが、離婚は法的に不可能と判り、失望を味わう。誠に悲劇的人物である。

グレースは元来、マーティ同様に森の質朴な娘であった。しかし数年に亙る上流学校での教育の為に、‘good old Hintock ways’ (p. 49) を捨てて、都会的な上品な生活に慣れた娘になったのである。或る批評家の表現を借りれば、彼女は天然の土壌から採られて、温室で促成栽培され、又、元の生れた土に移植された植物である。^⑥ この再移植された土地への適応の過程で起る葛藤は、ハーディが好んで扱うテーマである。 *Under the Greenwood Tree, Far from the Madding Crowd, The Return of the Native* 等で既に扱われている。

一身の内に、‘modern nerves’ と、‘primitive feelings’ (p. 358) の同居するこの女主人

公は、古巣ヒントックの非文明的な生活への違和感が徐々に薄れ、同化の兆しを示し始める。それを阻止し、フィッツピアズと結婚させるのは、野心的な父親である。しかし彼女も又、一時的な温室育ちの経験から生じた漠然たる夢を、その結婚に抱いていたのである。幼馴染みのジャイルズに対する態度も、父親の意図をそのままに反映し、彼に幾分の心を残しながらも、結局は父親の考え方に同調する。父親は、グレースの行動のみならず、意識にも決定的な影響を及ぼし、支配するのである。誠に幼く、自主性も個性もない、その意味では魅力のないヒロインと言わざるを得ない。彼女の心がヒントックへの回帰を示すのは、夫の情事を尽く知り、自分の結婚が失敗であったと悟ってからである。ある日、太陽が傾きかけた頃、夫が嘘と分った口実を設けてチャーモンドに逢いに出掛けて行く。華麗な秋景色の中に、遠ざかって行くその後姿を、グレースが峠に立って眺めていると、ジャイルズが谷を上って来る。この時初めて、グレースの中に潜在していた森の娘の 'primitive feelings' が、突然呼び醒され、ジャイルズの姿に秋の実りの権化を見、その香りを嗅ぐのである：

He looked and smelt like Autumn's very brother, his face being sunburnt to wheat-colour, his eyes blue as corn-flowers, his sleeves and leggings dyed with fruit-stains, his hands clammy with the sweet juice of apples, his hat sprinkled with pips, and everywhere about him that atmosphere of cider.... Her heart rose from its late sadness like a released bough; her senses revelled in the sudden lapse back to Nature unadorned. The consciousness of having to be genteel because of her husband's profession, the veneer of artificiality which she had acquired at the fashionable schools, were thrown off, and she became the crude country girl of her latent early instincts. (pp. 246-7)

夫へ対する嫌悪への反動として、グレースの価値観は、コペルニクス的転回を始めるのである。彼女は父親に、自分は上流学校に行かせられずに、マーティの様に森の娘でいた方が幸福だったのにと愚痴を零すが、人間の優劣を決定するのは、学識ではなく、人間の本質的なものであると悟る。その時の彼女の目には、ジャイルズこそ、人間としての本質的な美德を、純粹に具現する飾りなき男として、崇高性を帯びて映るのである。夫は失踪するが、法律は二人の結合を許さない。チャーモンドに厭きて帰って来た夫から逃れたグレースは、偶然の出来事から、森の中のジャイルズの小屋に匿われることになる。彼は病後にも拘らず、騎士道精神を発揮して、彼女の名誉への慎み深い配慮から、小屋をグレースに譲り、自分は秋雨の中に野宿し、病がぶり返して死んで仕舞う。自分本位の臆病な道徳的行為の故に、彼を殺したと自らを責めながら、夫を遠ざけ、マーティと二人で墓参りを続けるグレースである。しかし、やはり彼女は前非を悔いる夫と和解し、自分の為に死んだジャイルズの墓に、マーティと一緒に詣でる約

束も反故にして、森を後に都会へと去って行く。

社会的地位、異性間の吸引、森林世界への密着度と、三つの関係は以上の如くである。

これまで見てきたことから判るように、人物間の緊密な相互依存関係は、ハーディ作品には常に見られることながら、まるで建築物の枠組を見るように、整然と組合わされていて見事である。しかし、ビーチの述べる如く、登場人物は総て並型サイズで、他を圧倒する強烈な個性の持主は存在せず、集中性に欠け、興味の焦点は分散、移動を続けるので、本当の主人公は誰かとなると、仲々に不分明である。グレースはプロットの中心に位置して、最も多く舞台に現われるが、余りにも小心で、世間態に囚われ過ぎ、しかもあまり情熱を持ち合せず、物語の中心人物としての貫禄に欠ける。特に後日譚的な夫との和解のくだりは、常識的な現実への妥協であり、作者はその際の彼女の心的過程を強かな自己欺瞞として、シニカルに描いていると考えられる。彼女は決して悲劇的ヒロインの高みへは上る事の出来ない人物である。作者の意図は、この作品を人物群の動きのアンサンブルを抱え込んだ、もっと大きな枠の中に見付けねばならないであろう。*The Woodlanders* という題名が、それを示しているのである。

Ⅲ

The Woodlanders の舞台は一面の緑の樹海である。所々リンゴ園が散在する広大な森林地である。枝は緑色の影を投げかけ、夏の頃でも真昼以外は、太陽は完全に見えることはなく、木の間隠れに照りつける無数の小さな星となって見えるだけである。作者はこの故郷近くの森林地の生活様式、否、人間を含めた動物相、植物相の総てを、自家薬籠中の物として見事に描き出している。そして、動物にも木々にも作者は人間的感情を読みとるのである。この生態描写の背後に、我々が常に感じ取るものは、詩人の存在である。時には森の生態がノスタルジアを誘うリリカルな筆致で描かれる。春夏秋冬の推移のリズムに応じて変化する森林の美しい景色と、その中でそのリズムに合わせた仕事、行事に従事する森の人々の姿がある。牧歌的情景描写は不断に折り込まれている。此処にこの作品の魅力の一端がある。森の自然との交感に生きる、ジャイルズやマーティを包む理想化の香りも、斯かる牧歌性と大いに関係があるのである。

現実には、森林地に住む人々の生活は木に依存しており、人々は森林に依り生活を制約されているのである。大小の木々を伐採し、材木、樹皮、枝編み細工品、茅葺き用刺し串等の商品を作って売ることによって生活を立てる。そして森林の消耗を防止し、その生命を維持する為に植樹を行うのである。森林地の生態は、牧歌的面からのみ描かれてはいない。屋間は楽しい風情を添える鳥や小動物の世界も、夜ともなれば、生きる為の残酷な弱肉強食の世界と転じる。人間の銃や罠の危険もあるのである。

Owls that had been catching mice in the outhouse, rabbits that had been eating the winter-greens in the garden, and stoaks that had been sucking the blood of the rabbits, discerning that their human neighbours were on the move discreetly withdrew from publicity, and were seen and heard no more till midnight. (p. 24)

植物世界も又、例外ではなく、相隣る木々は絶えざるダーウィンの生存競争を続けている。

Next were more trees close together, wrestling for existence, their branches disfigured with wounds resulting from their mutual rubbings and blows.... Beneath them were the rotting stumps of those of the group that had been vanquished long ago, rising from their mossy setting like black teeth from green gums. (p. 376)

又、木々は蔦にからまれ、地衣類や真菌類に生命を吸い取られている。

On older trees still than these huge lobes of fungi grew like lungs. Here, as everywhere, the Unfulfilled Intention, which makes life what it is, was as obvious as it could be among the depraved crowds of a city slum. The leaf was deformed, the curve was crippled, the taper was interrupted; the lichen ate the vigour of the stalk, and the ivy slowly strangled to death the promising sapling. (p. 59)

この森林地の動植物の生態は生存競争に基づいて居り、その為に傷つき、或は生命を失い、その意図の実現を阻まれる。森の世界、否、宇宙に遍在する、この 'the Unfulfilled Intention' に呻吟するのは、又、人間の宿命でもある。森林地で展開される人間のドラマは、この生存競争の様相であり、結果的には「果たされざる意図」の証しに外ならない。

The Woodlanders には劇的緊張と呼ぶに相応しいシーンは殆ど皆無と言ってよく、全篇これ、意図の挫折に依る苦痛の調べに満ちている。作者の目標は明らかに、最終ページのマーティの墓前のエレジーへと向けられているのである。J. R. ブルックスが「一般的に言って、この作品のプロットはセンセーショナルな暗合や破局的な出来事に依って展開されると言うより、寧ろ累積した一寸した行動や孤立した意図が、ヒントックに生きるもの達の緊密な相互依存関係に依って、互いに摩擦し合って損なわれることで展開されている。」^⑦と述べているのは至言である。ビーチはこの作品をドラマと誤って、これは出来事の関連のない羅列で、散漫な年代記の様であると述べたと言わざるを得ない。これは、*The Return of the Native* のような劇的緊張を狙った作品ではなく、森林の植物世界の生態と、其処に住む人間の世界とを並置し、

或は重ね合わせて、触れて一個所が揺れると全体が震えるような緊密な依存関係の 'great web' (p. 21) の中で、森林の樹木の如く、相互に影響し合う人間の生態を描いているのである。それ故、登場人物もその目的に添うべく、強烈な個性を持たせる事を故意に避けて創造されているのである。

森林地に生存競争を展開する人間にとっては、生計を与えてくれる森林そのものが、闘うべき相手でもある。其処には厳しい労働がある。メルベリは若い頃からの肉体の酷使で、体中リューマチや痙攣に悩まされている。木の霊に取り憑かれた妄想に病む者もいる。

マーティは生存競争の世界で、「果たされざる意図」のシンボルそのものと言い得る。聡明さと潜在的能力を持ちながら、森林の荒仕事にしかそれを発揮できないのは、'a cast of the die of destiny' (p. 8) に依って、社会的地位の低い家に生れたからに過ぎない。マーティは最初に舞台上で登場して、彼女が主役であるかの如き感を抱かせる。貧困の中、彼女は病める父に代って深夜一人で仕事をしている。其処へ女地主の使いで散髪屋がやって来る。そして彼女の弱い立場に付け込んで、金をちらつかせながら、彼女の女として唯一の自慢である美しい髪を、女地主のかつら用に売れと迫る。彼女は家から追い出されはせぬかとの不安を抱きながらもそれを断る。意中の人ジャイルズが居ればこそである。仕事を終えて外に出た彼女の耳に聞こえてくるのは、茂った枝々が風で擦れ合い、傷つき、軋む音と、木々の 'vocalized sorrows' (p. 15)、獲物を漁る梟の金切り声である。偶然の事からマーティは、ジャイルズの心はグレースに在り、又、メルベリの二人を一緒にする意図をも知る。誰からも無視される最下位の社会的立場に加えて、否、それ故の残酷な雌雄淘汰である。女地主が男を捕える罠として利用する意図であることを知りながら、マーティは絶望のあまり、'Nature's adornment' (p. 38) たる髪を、即ち自分の「女」を売り渡す。初めから彼女の「意図」は果たされざるものと運命付けられていたのである。以後、彼女は恋愛の活舞台へは全く登場しないのである。マーティにとって人生は、失意の溜め息である。この無学な森の娘が寒風の中で、植苗の名人のジャイルズの手伝いをしながら、自分の悲恋の思いを、苗木の一生に託して語る件りは、彼女の魅力を余す所なく伝える。

'How they sigh directly we put 'em upright, though while they are lying down they don't sigh at all,' said Marty.

'Do they?' said Giles. 'I've never noticed it.'

She erected one of the young pines into its hole, and held up her finger; the soft musical breathing instantly set in which was not to cease night or day till the grown tree should be felled—probably long after the two planters had been felled themselves.

'It seems to me,' the girl continued, 'as if they sigh because they are

very sorry to begin life in earnest—just as we be.’

‘Just as we be?’ He looked critically at her. ‘You ought not to feel like that, Marty.’ (p. 73)

マーティのこの極度に鋭い感受性は、総て生あるものの実態を洞察している点で、作者と同じレベルに達している。その点、可哀相にも傍に居る彼女の存在すら忘れて、グレースへの思いに没頭しているジャイルズを凌いでいるのである。マーティには所詮人間的交わりは有り得ず、彼女に有るのは植物との交感のみである。常に孤独な娘であったのである。健気にも忍従の生活に生きながら、彼女は時折観察者として、愛欲のドラマの重大転換点にちらりと姿を現わす。*The Return of the Native* に登場する、荒野の精とも言うべきディオゴリ・ベンを想起させる。そしてマーティは、ジャイルズの失恋を予言する落書きをしたり、フィッツピアズとグレースの恋の末路を予言したりする。又、チャーモンドを美しく見せている髪をフィッツピアズに暴露して、二人の仲を裂く。マーティの奪われた「女」が復讐するのである。それに依って恋愛進走図は逆転する。フィッツピアズはチャーモンドからグレースに帰り、グレースは彼を避けてジャイルズへと向う。そして、富と権力を一身に集めるチャーモンドは、嘗ての情人に射殺され、又、ジャイルズはグレース故に命を落し、「果たされざる意図」の最大の犠牲となる。最終的には、フィッツピアズとグレースの陽の結合、ジャイルズとマーティの陰の結合が完成される。ジャイルズの死後、略奪された髪も元通りに伸びたマーティが、彼の森の道具とリング酒圧搾機を入手するのは象徴的である。

物語の展開に於いて、マーティの髪同様に、主要登場人物全員の運命を左右する重要な役割を果すのが、マーティの父ジョン・サウスの家の庭に立つ、一本の榆の大木である。この木に依って、作者は詩的想像力を駆使して、森林の人間に与える影響力の一端を示すのである。樹木依存の原始的生活に於いて、この榆の木はジョンに敵対する働きをするのである。彼はこの木が風に揺れる度に、倒れて来て自分と娘を潰し殺すのではないかと妄想に捕われている。加えて、親戚関係にあるジャイルズの所有する数軒の土地家屋保有権が、ジョンの死で法的に期限切れになる事になっているので、ジョンの悩みは倍加する。

‘...The shape of it seems to haunt him like an evil spirit. He says that it is exactly his own age, that it has got human sense, and sprouted up when he was born on purpose to rule him, and keep him as its slave. Others have been like it afore in Hintock.’ (p. 121)

樹木に依存して生きる森林人ならではの強迫観念である。マーティの髪を手に入れて満足した女地主は、フィッツピアズにジョンの診察を依頼する。医師はいとも合理的判断の元に、その木の切倒しをジャイルズに命じる。彼は仕方なく、他の総ての樹木同様に女地主が所有権を有

する榆の木を、無断で切り倒すことになる。榆の木を敵としながらも、奇妙に自己と同一化していたジョンは、その木が姿を消したのに仰天して息絶える。命ぜられたとは言え、ジャイルズは自ら手を下して、木とジョンの生命を奪ったことになる。恰もその報復でもあるかの如く、彼はチャーモンドから不動産権を奪われ、マーティと同様な社会的地位に落ち、又、その為にグレースをも失い、‘the background of human life and action’ (p. 131) へと退き、「果たされざる意図」の犠牲となって自殺的犠牲死を遂げるに至る。彼の悲劇の原因は勿論メルベリ親子にもある。しかし、文明社会の法—不動産権法と特に離婚法—が遙かに大きな比重を持つ。(但し、この離婚法の問題は、この作品の序文での作者の言及にも拘らず、此処ではプロットの便宜上利用されている程度で、正面切って取扱われるのは、*Jude the Obscure* に於いてである。) 榆の木の切断は他の要素と絡み合って、連鎖反応的にメルベリ父娘の不幸にも連なり、遠くは、女地主と医師との本来似合いの結婚を、皮肉にも妨げる事にもなるのである。

サウス親子は文明・人工の側から、生命と「性」の略奪の被害を被る訳であるが、この被害そのものが、作者のいつもの暗合を絡めた因果関係の網を経て、活舞台の外側から、略奪者の「意図」を阻む結果を生んだと言い得よう。各自の意図が、緊密に結ばれた相互依存関係に依って、互いに摩擦し合い、損われることを示すのが、この作品の狙いである故である。

無責任で移り気なフィッツピアズと因循姑息なグレースに通ずるものは、永続性のない感情の浅薄さである。ジャイルズに見られる如き深く一途な誠はない。そして、それ故二人は悲劇を避けられる。彼等は森林世界に一波瀾起した後、自分達は現実に適応して元の鞘に収まり、森林地を後にして、都会へと去って行く。作者はこの和解のシーンを、かなりコミカルなタッチで描いている。果してフィッツピアズが二度と浮気沙汰を起さぬか否かは、何とも言い難い問題である。ハーディ流の結婚観に依れば良い答は期待出来そうもない。^⑥

主要登場人物が「果たされざる意図」の犠牲となって滅び、或は森林地を去った後、舞台上に登場してフィナーレを飾るのはマーティである。深夜の墓地、粗末なジャイルズの墓の傍に、唯一人手向けの花を携えて、月光を浴びて佇む細りとしたマーティの姿は、崇高でさえあり、女性的属性を捨て去った、抽象的ヒューマニズムを身につけた存在のようであったと作者は述べる。そして、ジャイルズに捧げるエレジーが、彼の善を讃える独白が、哀調を抑えた声で聞こえてくる。

‘Now, my own, own love,’ she whispered, ‘you are mine, and only mine; for she has forgot ’ee at last, although for her you died! But I——whenever I get up I’ll think of ’ee, and whenever I lie down I’ll think of ’ee again. Whenever I plant the young larches I’ll think that none can plant as you planted; and whenever I split a gad, and whenever I turn the cider wring, I’ll say none could do it like you. If I ever forget your name let me forget

home and heaven !...But no, no, my love, I never can forget 'ee; for you was a good man, and did good things!' (p. 444)

このエレジーはこれまで繰り返し広げられて来た、暗い色調が支配的なドラマの総てを浄化する力を持つ。そして、マーティを、ハーディの描く女性達の、珠玉の一つに数え得るに足るものとする。世のあらゆる悲しみを背い込み、「果たされざる意図」を具現するマーティは、やっとジャイルズを独占したと感ずるのである。彼女は初めて愛の告白をするのである。彼女は報いを求めぬ純愛を捧げ続ける事を誓い、心の中で彼に永遠の生を与える。そして、今後も厳しい忍従の中に、ジャイルズの価値観を引き継ぎ、自然に根ざした生業の後継者となる決意を表明している。

作中に、季節の循環に依る腐敗と再生、死と生の繰り返しが見られる如く、そして、マーティの断ち切られた髪が甦った如く、ジャイルズはマーティの中に再生するのである。「果たされざる意図」というペシミスティックな人生観に於いて、これは一つの救いと希望を与えていると言い得るのである。

作者ハーディ自身の問題が残っている。作者はジャイルズの死後、その忠実な助手を勤めたクリードル老人に、ジャイルズの死と彼の様な田園人の減少を嘆かせるのである。

'...Well, I've knowed him from table-high; I knowed his father —...— and now I've seen the end of the family, which we can ill afford to lose, wi' such a scanty lot of good folk in Hintock as we've got....' (p. 393)

即ち、マーティのジャイルズへのエレジーは、古き良き田園人、単純ながらも堅実な、自然に根ざし密着した伝統ある生活様式、そして又、斯かる生活に生きる人生の尊厳への、作者自身のエレジー、ノスタルジーを示すものではないであろうか。同時に又、複雑な人工的文明社会の中に在って、頼るべき神も自然も失い、自己の空しく不毛の欲望の肥大に安定性を失い自ら苦しむ都会人に、一考を促す意図を持つものではないであろうか。

註 [Text は Macmillan の The Greenwood Edition を使用]

- ① F. E. Hardy : *The Life of Thomas Hardy*, p. 358 (Macmillan, 1965)
- ② J. W. Beach : *The Technique of Thomas Hardy*, p. 158 (Russel & Russel, 1962)
- ③ I. Howe : *Thomas Hardy*, p. 103 (Weidenfeld & Nicolson, 1970)
- ④ H. C. Duffin : *Thomas Hardy*, p. 49 (Manchester University Press, 1967)
- ⑤ M. Williams : *Thomas Hardy and Rural England*, p. 160 (Macmillan, 1972)
- ⑥ M. Millgate : *Thomas Hardy*, p. 250 (The Bodley Head, 1971)
- ⑦ J. R. Brooks : *Thomas Hardy*, p. 218 (Cornell University Press, 1971)
- ⑧ F. E. Hardy : *The Life of Thomas Hardy*, p. 220 (Macmillan, 1965)

(昭和53年9月30日受理)